

最後の指揮台 朝比奈隆

「おそらく、これが先生の最後の演奏になる。そのつもりで、気合い入れてや。」

マネージャーが、前半の演奏を終えて後半を待つ楽屋で、しばらく出するような声で言いました。楽器の手入れをしていた楽団員たちの手が、止まりました。

ほんのわずかですが、楽屋が静かになりました。

「また、しよう談やる。」

「そんなわけないやん。」

マネージャーの言葉を否定しようという声があちこちで上がりました。その一方で、楽団員たちには、「いつか、こういう時がくる」という、覚悟のようなものがあつたようです。みな厳しい表情をしていました。

二〇〇一（平成十三）年十月二十四日、愛知県芸術劇場コンサートホール。

この日、私がコンサートマスターを務める大阪フィルハーモニー交響楽団は、九十三才になる朝比奈隆先生の指揮でチャイコフスキープログラム演奏会に臨んでいました。大阪フィルは、朝比奈先生が五十年以上もの長い年月をかけて育て上げてきた交響楽団です。

朝比奈先生は九十才を過ぎても精神的に指揮活動を続けていましたが、その年は九月の初めごろから体調がすぐれず、ファンの方々も私たち楽団員も心配していました。

その日前半の演奏が始まる時、楽屋からぶ台のそでまで先生は車いすで移動しました。

「先生、私がかたをお貸ししますよ。」

と、マネージャーが声をかけると、

「自分で歩くよ。」

と言つて、長身の朝比奈先生は、一歩一歩ゆっくりと指揮台に向かって行きました。

そこは、先生が自分の生がいをかけた仕事場なのです。

前半の「ピアノ協奏曲第一番」の演奏が終わり、自分の楽屋にもどった朝比奈先生は、横になつて休みました。

「後半が先生の最後の演奏になるかもしれない……」と、楽団員の楽屋に重苦しい空気がただよっていたのは、ちょうどそのころでした。

後半の演奏になりました。左手をふ面台について長身の体を支えた朝比奈先生が、右手の指揮棒を静かにふり下ろすと、クラリネットが奏でる重厚なメロディーとともに「交響曲第五番」が始まりました。指揮棒の動きからは、この曲と、作曲者であるチャイコフスキーへの朝比奈先生の熱い思いが、私たち演奏者にも強く伝わってきました。

「よし、ふ面通りだ。」

これが朝比奈先生の口ぐせでした。

「作曲者が指示した通りに演奏する、というのが先生の主義だったのです。」

「だめだ、だめだ。もう一度。」

と言われた時は、ふ面通りに演奏ができていないということですよ。」

「作曲家の魂と対話することを大切にしない。」

朝比奈先生は、いつもそう言い続けました。私たちは、先生といっしょに、作曲家の思いえがいた通りに曲が仕上がるまで、何度も何度も厳しい練習をくり返したものです。

先生は、何百回となく演奏した曲であっても、演奏のつど、真新しいスコアを用意し、練習で気づいたことや、楽団員に指示したことを書きこんでいました。九十才を過ぎても、先生はこのことを自分自身に課していました。

私は、よく言ったものです。

「先生、このスコアに書かれたことは、前に演奏した時のものとほとんど同じですよ。」
すると先生は、

「ははは、毎回同じでも、それが新しい発見なんだよ。作曲家の偉大さがわかるんだよ。」
と言って笑うのでした。

後半の演奏が進むにつれ、朝比奈先生の体は限界に近づいてきているように見えました。しかし、指揮棒をふるその手は、まるでチャイコフスキーの魂と語り合っているかのようでした。演奏している私たちにも、その思いが伝わってきました。

最後の和音が鳴り終わらないうちに、会場は万らいはく手に包まれました。

朝比奈先生は、しばらくふ面台にもたれかかっていた私には、先生その姿がなみだでかすんでいます。指揮台を降りようとする先生に、私は思わずかけ寄り、そして、耳元にささやきました。

「先生、もういいですよ。もう終わったんです。」

「立つことが私の仕事だ。」

「座って指揮をするようになったら、私は引退する。」

練習であっても、もちろん本番であっても、先生は決して指揮台にイスを置きませんでした。

観客のわれんばかりのはく手に、背筋をぴんとのばし、笑顔で応える朝比奈先生。

「これなのだ……。」

私は先生の、そのまっすぐな背中を見つめました。